

はなかわの風

HANAKAWANO-KAZE
地域連携相談センター広報誌

■平成23年12月21日発行
■発行人：星野充明
■編集長：綾部潤和
■企画・制作
花川病院地域連携相談センター
地域連携課

優秀・優良演題に選ばれました！

「認知症高齢者の睡眠障害と睡眠覚醒リズム改善のこころみ」



平成23年7月14日(木)、15日(金)に東京都で開催された第61回日本病院学会において、当院が発表した演題が、優秀・優良演題として推薦され、平成24年6月21日、22日に福岡市で開催される第62回日本病院学会において表彰されることになりました。

「高齢でも、重症でもあきらめないリハビリテーション」を行っている当院には、認知症を伴った高齢者の方も多く入院されてきます。昼夜逆転傾向や傾眠、覚醒のパターンが崩れてしまうことで、リハビリテーションが進まない場合が出てきます。それを改善していくために、花川病院回復期リハビリテーション病棟4階でこの研究に取り組みました。

■「刺激の介入」で日中の「ウトウト」時間に変化が・・・

大淵らの先行研究に基づき、①日光浴または高照度光療法の実施、②13時から15時の間の短時間仮眠を取る、③夕方に軽い運動を行う・・・これらの「刺激の介入」を、昼夜逆転傾向があり、認知症の評価スケールで判定ができなかった5名の患者さんに行ってみました。30分ごと24時間の「睡眠日誌」を記録、「覚醒」「熟睡」「ウトウト」の3項目で分類、4週間にもわたり24時間データを収集していきました。

結果、「日光浴」は生活リズムを修正させ、午前中の覚醒につながりました。「仮眠」では脳の回復と身体の休息が得られ、夕方の居眠りが減少しました。また「夕方の軽い運動」では身体活動が増加し、夜間の睡眠時間が増加しました。日中の「刺激の介入」により、睡眠・覚醒リズムが整えられ、リハビリにつながっていきました。

「重度の認知症の方でも生活リズムを整えられるということがわかりました。他の患者さんたちにも取り組んでみたいと考えています。スタッフみんなの協力を得て調査・研究を行ったので、評価していただき大変うれしく思います。」と佐藤郁看護師。

「患者さんの豊かな生活を実現する」ために職員が日々努力したこと。このように評価いただけたことは私たちが更に頑張る「原動力」となります。この表彰を職員みんなで喜びたいと思います。(綾部潤和)



研究を行った 佐藤郁、田中百合子(後列)
棚田真由美、庄司典子(前列) 各看護師

花川病院のホームページ

<http://www.hanakawa-kyouseikai.or.jp/>

石狩市花川南7条5丁目2番地 (0133) 73-5311

急性期から在宅へ。 バトンをつないでいくために



院長、星野充明のご挨拶からスタート

10月25日。

日頃患者さんをご紹介いただく急性期病院やお世話になっている連携機関のみなさまのお役に立つような情報を発信できたら・・・そんな思いで取り組んだ、「石狩リハビリテーション・地域連携懇話会」。記念すべき第1回はロイトン札幌にて開催し、27機関・53名の方にご来場いただきました。花川病院が懇話会を開催するというので、ちょっと不思議に思われた方もいらしたことでしょう。私たちにとっても初めての企画。連携機関のみなさまのお役に立つような情報を発信できたら・・・そんな思いで、取り組みました。

■開催にいたるまで

回復期リハビリテーション病棟に入院する患者さんのほとんどは急性期病院からの紹介で、石狩市をはじめ札幌市北区・東区・西区・手稲区 当別町 江別市など様々な地域から入院されます。その方々が再びご自宅に戻られる際には、地域の医療機関・居宅介護支援事業所・介護サービス事業所の協力が欠かせません。回復期リハビリテーションはちょうど、その急性期病院と在宅生活の「中間」にあります。病気になってしまった方の在宅生活を再開するには、わたしたちが「つなぎ役」となって急性期病院と在宅生活を結び付けていく必要があります。

回復期病院として、「急性期」「在宅」の双方向に情報を発信し、交流の場となるような機会を作ることが出来ないだろうか。このような思いから、今回『石狩リハビリテーション・地域連携懇話会』を設立するに至ったのです。



■第1回目は？



手稲溪仁会病院脳神経外科部長 板本孝治先生

さて、記念すべき第1回目のテーマは、来年から本格始動する「脳卒中あんしん連携ノート」を取り上げました。今後、このノートを持って花川病院に入院してきたり、地域の診療所にもこのノートを持って外来受診する人が増えてきます。ノートの目的をみんなで共有して患者さんにとっても私たち医療職にとっても効果的なものにしていきたい。9月から施行が始まったこともあり、第1回目の回復期発信の懇話会に相応しいテーマであると思いました。そこで、北海道地域連携クリティカルパス運営協議会運営委員である手稲溪仁会病院脳神経外科部長 板本孝治先生にご講演をお願いいたしました。

板本先生の講演の要旨を、一問一答形式でまとめてみました。

QUESTION	ANSWER
脳卒中あんしん連携ノートの目的は？	脳卒中の 再発予防 と退院時 基本情報の共有 です。
全員がもらえますか？	急性期または回復期の病院から 自宅へ退院し、かかりつけ医や専門医を定期的 に受診できる方が対象となります。(来春の本格稼働の際は、対象者を拡大することも検討中です。)
いつもらえますか？	急性期または回復期の 病院を退院する ときに渡されます。 いまのところ、 無料 です。
ノートの内容は？	①患者教育～病気やくすりのことが詳しく書かれています。 ②連携パスの部分～退院時情報と外来通院情報の共有 ③セルフケア～生活の記録 となっています。
どのように使いますか？	患者自身がノートを所有し、かかりつけ医や専門医を受診する際に 提示 します。本人が持っていますので、いつでも必要なときに 専門的な情報を共有できる利点 があります。
かかりつけ医にお願いすることは？	まずは、このノートへの 記載についてご協力 いただけることです。記入者は医師でなくてもかまいません。ノートに病医院名をご記入いただき、普段の診察で行なったバイタル測定や検査など、 実施したことだけを記載していただくだけで十分 です。あとは、半年または1年に1度の専門医への受診を勧めていただければ、データ登録は専門医(急性期病院)で行います。

■ 顔のみえる関係作り

講演のあとは、懇親会を行ないました。ご来場いただいたみなさまが、一人でも多くの仲間と知り合い、今後の連携に役立てばよいと思いました。短い時間ではありましたが、名刺交換をしたり、講師の板本先生に直接質問する場面が至るところで見受けられ、とても嬉しく感じました。今日挨拶できたことで、明日からの連携に何か良い影響があるかもしれません。

連携の基本は、**顔と顔**。お互いの顔がみえる関係作りにも、この懇話会がお役に立てればと思います。次回は、2月21日(火) 同じロイトン札幌での開催予定となっております。

(当瀬 恵)



レバンガ北海道を応援します！

プロバスケットボールチーム『レバンガ北海道』をご存知ですか？
このたび花川病院は、レバンガ北海道を運営する北海道総合スポーツクラブと正式にスポンサー契約を結びました。

「バスケットボールを通じて北海道を元気にしようと奮闘する同クラブの折茂理事長を応援したい」との思いから支援することに。ぜひみなさんも会場で、レバンガ北海道の応援をお願いします！(当瀬恵)



12月6日付 北海道新聞でも紹介されました

連携は、互いの事情を“察する”こと、からはじまる。のかな？

第3回江別地域ケア連絡会定例会「いきいきと暮らせる町づくりを目指して」



花川病院地域連携相談センターは、花川病院の仕事だけではなく、石狩地域リハビリテーション推進会議事務局医療機関（石狩地域リハビリテーション広域支援センター）として、石狩圏域の「高齢でも、障がいがあっても安心して暮らせる町づくり活動」にも参加しています。そのつながりで、11月24日に江別市保健センターで開催された、第3回江別地域ケア連絡会定例会「いきいきと暮らせる町づくりを目指して」のお手伝いにかがいました。



今回のテーマは「急性期病院を中心とした地域連携～知ってお得！受け手の心得、送り手の心得」で、綾部がまとめ役ということで出演いたしました。一般的に「病院は敷居が高い」「急性期病院と連携がとりにくい」という声が在宅側から聞こえてきます。この日は、急性期病院の役割や機能をみんなで確認し、急性期病院と在宅がどのように連携をとっていったらいいのかを考えてみました。その中で、あるパネリストからの「急性期病院の事情を”察して”かわかります」という発言が印象に残りました。お互いの事情を「察して」協力したり支えあったり…。そこから連携は深まっていくのだろうな、と改めて感じたひとときとなりました。（綾部潤和）

写真提供：江別地域ケア連絡会

関心の高さに敬服！

～花川南町内会 第2回お楽しみ昼食会～

花川南町内会で行われた「第2回お楽しみ会食会」にお呼ばれました。11月12日（土）、「お楽しみ」といっても、昼食までは勉強会です。70歳以上の住民のみなさん60名が参加されました。

私たちがうかがったのは勉強会での情報提供のため。当瀬からは「介護保険の使いかた」、そして綾部からは「花川病院の使い方」を説明しました。皆さんの学習意欲や関心の高さにはこちらが敬服。介護保険のしくみや、病院は役割分担をしていることなどを真剣に聞いてくださいました。私たちも、今は必要がないかもしれませんが、もし病気になったり介護が必要になったときの「備え」になっていただけたら、という思いでお話ししてきました。

この地域の方たちが安心して暮らしていくことができるように、これからも「出前」いたします。（綾部潤和）



編集後記

日総研出版より11月に発行された、「地域連携入退院支援」Vol.4 No.5号に「花川病院の地域連携のありかた～広報誌等を活用した地域連携の実際」という綾部の原稿が掲載されました。この3年間取り組んできた「連携は自分から」モデルをまとめたものです。また11月18日発行の北海道医療新聞「ひと短信」コーナーでは「どこにでも入り込める人柄で地域連携を実践」と「おばさんの地域連携」モデルを実践している当瀬看護師が紹介されました。恥ずかしながらも紹介いただく機会をいただいて感謝しています。ふたつの地道な地域連携活動で、もっともっとたくさんの人や機関とつながっていきたいと思います。（綾部）